

ウェスレーへの東方の影響、A 原罪理解

清水 光雄

人間の墮落に関し西方の議論で最も影響を与えた神学者はアウグスティヌスです。彼は相続された罪責を強調し、腐敗がどのように子孫に伝えられたのかを説明せず、なぜ人間が腐敗したのか、その正当化を求めた。人間がアダムの罪に参与したため、人間の現在の腐敗はアダムにその原因があり、人間は罰を受けるに値すると言う。このアウグスティヌスの考え方が多くの後期の西方神学者たちの議論を導いた。

ではアダムの墮罪の結果、人間に何が起きたと東方は考えたのか。死と腐敗が人生に導入され、その後の人類を支配するようになったと東方は考える。アダムの罪で人類に伝達されたのは罪責ではなく可死性・死ぬことです。アダムの墮落の結果、死と腐敗の人格的力への隷属が人間本性全体に受け継がれ、東方はこの墮落した人間の救いを罪の赦しという、法的に捉える西方の考え方と異なり、罪人自身の病い、人間本性の不完全性を癒す治癒的概念で人間の救いを強調した。

ウェスレーは西方の罪の赦しと共に、東方の治癒的な人間回復の道をも求めた (*BE*, 1:477)。ウェスレーは腐敗する人間の癒し与える創造の恵みと罪の赦しとしての回復の恵み、義認と聖化の恵みを強調した。

ウェスレーは生涯にわたり、創造、墮落、回復という大きなスケールで墮落した人間の救いを理解し、罪は人間を単純に定義する真理でも、人間の究極の状態を指し示さないことを述べる。人間は墮落から回復へのプロセスに生き、

神の恵みに人間が応答すべきです。墮落した人間に求められるのは罪からの回復です。罪が人間の究極的宿命ではなく、罪からの救いが救済の中心だったのです。

これから原罪に関する西方・東方の議論を展開するが、本書ではウェスレー関係の作品を本文で略記として註に挿入する¹。

- * *The Bicentennial Edition of the Works of John Wesley*, editor-in-chief Frank Baker (Nashville: Abingdon Press, 1984-) は *BE* と略記。
- * *The works of the Rev. John Wesley, M.A.*, ed. Thomas Jackson (London: Epworth Press, 1829-31) は *Works* と略記。
- * *Letters of the Rev. John Wesley, A. M.*, ed., John Telford (London: Epworth Press, 1931) は *Letters* と略記。
- * John Wesley, ed., *The Arminian Magazine: Consisting of Extracts and Original Treatises on Universal Redemption* (London, Fry et al., 1778 - 91) を *AM* と略記。
- * John Wesley, ed. *A Christian Library: Consisting of Extracts from and Abridgements of the Choicest Pieces of Practical Divinity Which have been Published in the English Tounge.* 50 vols (Bristol: Farley, 1749 - 55年) は *CL* と略記。
- * Albert C. Outler, *John Wesley* (New York: Oxford University Press, 1964) は *JW* と略記。

1. 西方・東方思想の原罪理解

1) 西方によると、アダムは完全な状態で創造され、この完全を実現することを神は望んだ。しかしアダムの働きに自己決定を行う能力が含まれ、説明不可能な形で、アダムはこの力を用いて神から離れ、墮落が起り、二通りの原罪理解を展開した。第一は全的墮落です。人間の墮落した状態は普遍的なので、全的墮落は人間の生まれながらの「自然的状態」(the natural

state) と理解され、神の恵みから離れ、罪責に満ち、その結果、人間は何もできない人間の無力性、全的墮落を強調した。

第二の原罪理解の特徴は原罪の相続された罪責の継承、つまり、子孫に罪責が遺伝され、人間の悟性・意志・自由を働かす人間の諸機能の働きが神に向け働かなくなり、罪の奴隷になった。従って、西方は救済の中心を罪の赦し、義認に置いた。

2) 西方は人間を原罪論で展開したが、東方は創造論で展開する。アダムの墮落は人間の本性を弱めたが、創造時の恵みで与えられた、ある程度の人間の自由は墮落した本性にも残る。東方は墮落後も継続して働く神の救いの恵みと、この恵みに応答できる人間の自由で、墮落した人間の本性を癒し、人間は完全へと回復する。また、神の与える恵みに人間が応答を拒否すれば、人間は罪責をもち、罪責はあくまでも個々人の人格的な罪理解で、遺伝されない。それ故、東方は全的墮落と罪責の相続を語る西方の二通りの原罪理解を否定し、罪人の癒しをもたらす治癒的救済論を強調し、人間の癒しを究極の目的とする聖化に救済論を置いた。

2. ウェスレーと東方・西方の原罪論

1) 東方影響下のウェスレー（全生涯）

ウェスレーは生涯東方思想の影響下で成長した。彼は人間の霊性を回復させる全ての可能性を神の恵みの働きと捉え、同時に、人間の主体性、つまり、神の恵みに人間が応答するのか、拒否するのか、あるいは、無視するのか、そのいずれかの人間の働きに関心を払う (*Works*, 9:194, *BE*, 1:477, 586; 2:184, 367; 3:349ff, 533)。それ故、神はご自分の救いの業をご自分一人で実現することはできず、人間の主体的応答が必ず必要です。西方が語る人間の無力性の主張は人間が神の恵みに応答しない時、人間は無力になり、人間本性の改革は困難になるが、もし人間が神の恵みに応答すれば、人間本性の欠点・弱点を徐々に癒す治癒的救済論をウェスレーはマカリオスから学んだ (*Library*I:143-4)。

2) 中期ウェスレーと西方の救済論 (1738 年以降)

① 1738 年 5 月 24 日の出来事で、プロテスタントの影響下に置かれたウェスレーは西方と同様に、墮落した人間の根源的腐敗性を確信し、キリストの贖罪の働きで人間の腐敗を赦す、神の恵みを語った (*Works*, 9:247; *BE*, 2:184)。

西方は全的墮落を人間の生まれながらの「自然的状態」と理解したが、ウェスレーは「自然的状態」(*BE*, 1:118, 251-5, 439; 2:177, 185, 190ff 等)をどのように理解したのか。

今、引用した箇所「自然的状態」という表現はない。ウェスレーは人間が罪人で、墮落している状態を「natural man」と記しただけです。彼は人間の墮落状態を人間の自然的状態と表現し、ルター、カルヴァン等の宗教改革者たちが説く全的墮落を意味しなかった。つまり、ウェスレーは「自然的状態」を人間の「全的墮落」ではなく、「墮落状態」と理解した。

ウェスレーは 1785 年の説教で「単なる自然の状態にいる人間は存在しない」(*BE*, 3:207)と述べる。問題はこの説教の表現と「自然的状態」との関係です。今日は詳しく説明できないが、この説教の表現は人間の無力性・人間の墮落性の確信と同時に、全ての人間が為しうる人間の応答をウェスレーは述べた。つまり、彼は人間の応答性と人間の墮落性を同時に主張することで、人間は全的墮落ではなく、本来的な墮落状態をこの説教で語った。このように、「自然的状態」と 1785 年の説教の表現は人間の全的墮落を意味せず、その意味で、ウェスレーは全的墮落を否定し、後で述べるが、罪責の相続をも拒否することで、彼は西方の二通りの原罪理解に同意しなかった。

② ウェスレーはシリアの修道士マカロスの論文を抜粋した時、原罪批判を行うマカロスの箇所を抜粋集で引用しなかった。マカロスは人間腐敗の現実を過小評価し、神が人間を回復する義認の恵みをマカロスが受け入れないから、とウェスレーは考えた。それ故、人間の根源的腐敗を確信するウェスレーは宗教改革者と同様、罪の赦しを語る西方の神学に力点を置いた。

③ 中期ウェスレーは相続された罪責を承認し、人類の契約の盟主 (federal head) としてのアダムという、改革派の考えを採用した (*BE*,1:185-7: *Works*, 9:332)。改革派の「墮落の転嫁」説によると、人類の代表として神と契約を結んだアダムはその契約を破り、その結果、アダムの罪責とそれに伴う刑罰が全ての子孫に転嫁された。しかしウェスレーはこの「墮落の転嫁」説に懸案を抱いたことを (*Works*, 9:294, 315,335) 次に述べよう。

3) ウェスレーの懸案は、彼が生涯一貫して主張した東方の人間の主体的応答と西方の生まれながら継承された、遺伝的罪責の考え、つまり、主体的応答を語る東方と人間の主体的応答と無関係な罪責理解の西方の、東方・西方の両者をどのように受け取るのかが懸案事項となった。

①

a ウェスレーは日増しに罪責の考えに落ち着かなかった。しかし彼が罪責の懸念に悩んだのは普遍的な人間の根源的腐敗性を疑うことではなく、神が人間に応答を求めている点にあった。

b 従って、ウェスレーは人間が罪を犯すその起源・原因を先祖のアダムの罪よりも人間本性の罪深い病に関心を持つ (*BE*, 1:477; 9:124f; *Letters*, 5: 231)。墮落する人間は咎められるべきだが、その咎めの原因は罪の起源・先祖の罪ではなく、人間が神の恵みを拒否した点を強調した。

②

a ウェスレーは原罪の表現よりも、人間の腐敗性の表現を好み (*Works*, 9: 274; *BE*, 2: 183)、人間本性の欠点・弱点の克服を求めた。勿論、ウェスレーは原罪という神学用語を神学者との論争や自分の著作で表現したが (*Works*, 9:274、*BE*, 2:183)、彼自身の著作や「説教集」では少ない。従って、ウェスレーは「原罪」という表現よりも他の表現で、例えば、「inbeing sin」(腐敗)、「inbred corruption」(生まれつきの腐敗)、「corrupt sinful nature」(腐敗する罪深い本性)、「Indwelling Sin」(内在する罪)の表現を原罪の表現の代わりに用いた。

b したがって、ウェスレーは国教会の『39 箇条』の信仰箇条を米国メソジ

ストが用いるために 1784 年に『25 箇条』に短縮したが、『39 か条』の第 9 条「人間の生まれながらの欠点は神の怒りを受けるに値する」と書かれた箇所を『25 箇条』で全て削除した。

そして、ウェスレーは原罪の転嫁された罪責で人間は呪われてはならないと考え（*Works*, 9:294）、1776 年に、ウェスレーはキリストの贖いの功績で、相続された人間の罪責は人間の誕生時に普遍的にキャンセル・無化されていると語り、次のように述べた。

「一人の人の違反によって審判が（この世の誕生の）全人類に到来し、呪われる者になった」ことは疑いもなく真理であり、全ての大人のみならず、あらゆる幼児にも妥当する。しかし同時に真理なことは「一人の人の義によって自由なる神の賜物が（幼児であれ大人であれ、この世に生まれてくる）全ての人間に到来し、義とされている」。従って、いかなる幼児であれ、「アダムの罪の罪責故に地獄に送られる」ことは今までなかったし、これからもないであろう。なぜなら、幼児たちがこの世に生まれるや否や、キリストの義によってアダムの罪の罪責がキャンセルされているからです」（*Letters*, 6 : 239f）。

中世で赤ん坊が洗礼を受けないと地獄に落ちると考えられ、罪責からの解放としての洗礼が救いの前提とされた。しかし、罪責は先行の恵みの発動で今や無効となり、罪責概念で誰一人、地獄に落とされる人々は世界のどこにも存在しない。こうして、ウェスレーは相続された罪責を認めたが、同時に、この考えに懸念を示し続け、この矛盾関係を、罪責のキャンセル・無化で解決した。人間に相続された罪責の赦しは先行のみで全人類に与えられているからだ。

3. 前・後期のウェスレーの原罪の生理的理解

1) 前期ウェスレーは先ほど述べた『39 か条』の第 9 条で「人間の生まれながらの欠点は神の怒りを受けるに値する」と書かれていたように、国教会に流れる罪責の考えを知っていたが、ウェスレーの前期説教「神の像」で人間本性の腐敗を罪責とは無関係に、自然生理的に説明する。『39 箇条』の第 9 条で、人間本性の腐敗はアダムの子孫で「自然に発生している」（自然の出産）と語

る。人間本性の腐敗の原因を問うことは、アダムの本性の腐敗がどのように子孫に伝達されたかです。東方はヘブル人への手紙 7 章 10 節「メルキゼデクがアブラハムを出迎えた時、レビはまだこの父の腰の中にいたからです」に言及し、あらゆる子孫はアダムの腰（罪深い肉体）を通して人類に伝達される。

前期ウェスレーは現在の腐敗する状態を生理的に説明した。説教「神の像」で、アダムとエバが食べることを禁じられた果物は血管に付着し、血流を妨害し、それらが人間を死ぬべき存在にした。東方は人間の死の開始をアダムが神から離反した結果と同一視した。人間が死ぬことの必然性を生理的トーンで説明する。死は様々な肉体的不調を引き起こし、諸機能を損い、『39 か条』の第 9 条と一致し、初期ギリシャ神学者とも一致した（マカリオス）。

2) しかし中期ウェスレーは、人間本性の腐敗が神の怒りと呪いを受けるに値すると述べ、そこで、ウェスレーは人類の契約の盟主としてのアダム、人類の代表としてのアダムを語る改革派の考えを採用し、キリストの功績のみで人間は救われ、アダムの罪責とそれに伴う刑罰は全ての人々に転嫁される（*BE*1: 185-7: *Works*, 9:332）、と「墮落の転嫁説」を述べる。しかし彼が前期で述べた、墮落の生理的説明は「墮落の転嫁説」を説く改革派の人々に不満で、腐敗の生理的説明への質問が改革派からウェスレーに提出された。確かに、腐敗の生理的説明は人間生活に働く神の恵み深い力を制限する、あるいは、生理的説明は神の変革する恵みの可能性を制限すると理解されたからだ。

例えば、1755 年、この生理的説明を批判したのがウェスレーと同じ大学出身のトンプソンです。罪から自由に生き、完全に聖化された両親がどうして墮落した本性を子供達に伝達できるのかです。この質問に対し、ウェスレーの返答は、完全に聖化された夫婦二人が結婚し、子供を持った場合、そのような腐敗の伝達は子供に起こらないのではないか、という一時的な答えしか与えることができず、更なる検討を続けた（*BE*, 26:571, 575, 580; *Letters*, 3:158 - 62）。しかしこの答えの明確さが彼に求められ、十分な答えを形成するために彼は時間の猶予を求めた（*BE*, 26:571, 575, 580, *Letters*, 3:158-62）。つまり、生理的な説明は人間の生活に働く神の恵み深い力を制限しうることを、トンプ

ソンの示唆でウェスレーは認識した (*John Wesley*, 299、292)。ウェスレーの究極的判断によると、両親の「靈的再生は自然的発生で伝達され得ない」との考えを彼は最終判断とし、生活に働く神の恵み深い力の制限を彼は「魂の起源に基づいて」で認めた (*AM*, 5 [1782]:195)。

この結果、中期ウェスレーは生理的説明を後退させ、「墮落の転嫁説」に一時心を向け、この考えに安住しようとした。しかし、神は人間に応答を求めておられるとの考えがウェスレーの生涯の確信であったため、彼は墮落の転嫁説に同意できなかった。

しかしウェスレーの“転嫁された墮落”の考え方が突如として薄れた。テイラーは原罪論を批判し、この批判に答えたのがウェスレーであったが、テイラーとの議論で、アダムが墮落することでその墮落が子孫に継承されることを神は望んでいない、そのことをウェスレーは確信し (*Works*, 9:294)、この結果、神は人間に相続される罪責をも求めないと彼は判断し、彼の「墮落の転嫁説」への関心は急激に薄れた。トンプソンのウェスレー批判にあったように、腐敗の生理的説明は人間生活に働く神の恵み深い力の制限をもたらし得るが、それ以上に、墮落の転嫁説は人間の応答を著しく損なうとウェスレーは考えた。

3) 後期ウェスレー

① アダム・人間本性の腐敗がどのように子孫に伝達されたかに関して、二つの立場、伝達説と繁殖説がある。前者は人類腐敗の原因を墮落したアダムの肉体と魂とが子孫に伝達されたためと理解し、後者はアダムによって肉体は伝達されるが、魂は神によって直接創造されるが、誕生時にあらゆる子孫の魂は罪深い肉体に置かれ、腐敗現象を示す。

② 1762年、ウェスレーは繁殖説の接近方法が原罪の伝達を説明できると、繁殖説を確信した (*BE*, 21:350、22:258)。そこでウェスレーは直ちにヘブライ人への手紙 12 章 9 節を通して、神は世界の初めに魂を創造したが、神が創造した人間の魂はアダムの腰にあり、肉体と同様、魂も両親を通して人間に伝達される。しかも、テイラーによると、アダムの呪いは単に肉体的死だけでなく靈的死にも深く関わる (*Works*, 9:240、244、247、258)。「靈的死」とは生

命や神の像の喪失です。アダムが最初に犯した罪の本質は人間の応答を妨げ、神からの自立をもたらした。アダムとエバが神の働きから離れた時、彼らは靈的に死に、神の類似性への喪失と人間諸機能の腐敗に導かれた。この世に生まれる、あらゆる子孫は既に神から離れ、靈的に死ぬ (*BE*, 1:185、2:189f)。人間が腐敗する最も根源的な原因は人間が相続する罪の罪責ではなく、人間が変革を求める神の恵みから引き離されているからだ。それ故、説教「人間の墮落について」(1782年)でウェスレーが明確に示したことは、後期ウェスレーは人間の応答を制限することを承認しながら、靈的に死ぬ人間が神の恵みに応答することで、人間が更に成長できることを伝えた (*BE*, 3:79f、4:165、188)。

③ 後期ウェスレーは生理的説明を行った。彼は繁殖説的考え方を1782年の論文「魂の起源に基づいて」(*AM5* [1782]:146-9、195-7)で発表し、腐敗の伝達に関し、彼は前期の生理的説明を再び受け入れた。そして、同年の1782年に書いた後期説教「人間の墮落について」でも生理的説明を行い (*BE*, 2:405-8)、腐敗の伝達に関してウェスレーは「墮落の転嫁説」に言及せず、人類の代表としてのアダムとの表現も削除した。そして彼は「アダムの腰 (in the lions of Adam)」(*BE*, 2:190)、と「アダムの類似性 (began in Adam's likeness)」(*BE*, 2:173)であらゆる子孫は与えられるとの生理的な働きで誕生を語り、この確信は前期説教の生物的説明と同様、後期説教で墮落は人間に死を導入し、動脈を古くさせ、動脈を硬くさせる方法で人間の諸機能を腐敗させる主題が繰り返しなされた (*BE*, 296-9)。ウェスレーは「アダムの腰」と「アダムの類似性」で人類の誕生を語り、墮落を生理的な働きで説明したのです。

なお、「アダムの腰」のテーマはヘブル7章10節「メルキゼデクはアブラハムを出迎えた時、レビはまだまだこれからこの父の腰の中にいたからです」のレビが存在した「父の腰の中に」「in the lions」of Abraham」の表現に由来し、「アダムの類似性」は創世記5章3節のアダムの類似性、つまり「アダムは…自分に似た、自分にかたどった男の子をもうけた」に基づいている。

また、アダムとエバではなく、アダムに生みの親の焦点を当てるのは、当時の生理学では、人間は母の土壌の「農地」に父によって植えられた「種」に存

在する、と考えられた当時の男性表現の生理的説明です。

(元静岡英和大学教授)